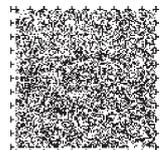


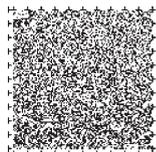
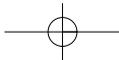


センターに咲く紅梅と雪化粧

目次

〔巻頭言〕 病院診療部長「国リハ山の会」……………2	〔お知らせ〕 埴保己一賞貢献賞の受賞について……………12
〔国際協力情報〕 西太平洋地域WHO指定研究協力センター 作業グループ会議（香港）……………3	〔卒業生訪問シリーズ〕 「センター学院卒業生の就職先を訪問して」 （リハビリテーション体育学科）……………14
帰国研修員レポート「車いすでの生活と夢」……………5	〔魚拓シリーズ28〕 カワハギ……………17
〔更生訓練所情報〕 頸髄損傷による四肢麻痺がある方の 自立訓練サービスの開始……………7	〔統計数値〕 平成21年度リハビリテーション 実施状況（1月報告）……………18
〔病院情報〕 当センターでの視能訓練士の役割……………9	





〔巻頭言〕

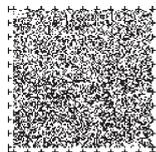
国リハ山の会

飛松好子 病院診療部長 研究所補装具製作部長

国リハ山の会は、里山を中心に安全第一、無理しない山歩きをモットーに活動している。

2008年に私がリハセンターに赴任したとき、私は病み上がりであった。50歳過ぎから山歩きを始めたのだが、運動経験のない素人が突然その様なことを始めたものだから身体がついていかず、故障やけがの連発で、およそその期間の半分は休んでいた。こちらに来る前も膝を故障し、山歩きは1年間行っていなかった。最後の登山は、2007年の5月の連休の剣岳の源次郎尾根であった。一時期は平地すら歩けなかったのだが、だんだん回復し、赴任した最初の5月の連休に、どうしても我慢が出来なくなり、膝の相談相手である東大整形外科の渡会公治先生の「早いんじゃないの…」という言葉が聞かなかったことにして、奥武蔵の伊豆が岳に出かけた。奥武蔵の山は、秩父に向かって西武線の左手側の山は急峻で、里山ならなかなかのほり応えがある。右手側の山は比較的なだらかで、ハイキングというにふさわしい。伊豆が岳はその左手の山であり、急峻で、途中岩場があったりして、変化に富んだ楽しい山である。子の権現まで縦走し、コースタイムの2割り増しだったが、何とか無事に帰ってこられた。一時期は山登りももうお終いかと考えていた私は、気をよくしてリハビリがてら毎月山に行くことにした。類は友を呼ぶもので、一緒に行きましょうという中高年やら、行ってみたいという若者やらが自然と集まり、一時期は20人近くで山を歩いたりしたが、今では大体7-8人くらいで月に1回里山を歩いている。メンバーは病院、研究所、学院、本館、更生訓練所とセンター全体に散らばっている。

去年は「有名な高い山に行きたい」という声に応じて、常連のみを対象に八ヶ岳連峰を、赤岳から横岳、硫黄岳と山小屋に1泊して縦走した。ランチタイムに何を作る

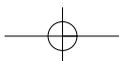


かも一大イベントで、昨年12月に関八州見晴台に行った時は、頂上でなべをしようということになり、それぞれ分担して荷を担いだのだが、なんと頂上で若者がザックから本物の土鍋を出してきたのには驚かされた。

例会は月に1回とし、その間はそれぞれの活動をしている。あるものは釣りをもっぱらとし、私は、これまた1年ぶりに再開したロッククライミングに勤しみ、若者同士誘い合って富士山に行くとか、時間と気の合ったもの同士で山に行くなど、結びつきは緩やかである。3月の例会は、“合ハイ”をしようということになり、広くセンターの老若男女に呼びかけて親睦を深めようと企画している。行き先は、日和田山、歩行時間3時間半程度のハイキングコースである。日は3月20日である。野山を歩いてみたいと思う方、出会いの場が欲しいと思っている方、ぜひおいでください。参加資格はセンター職員とその家族、友人の方々である。希望者は、飛松好子、または山の会メンバー（そこいら辺にいます）にご連絡ください。

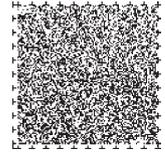


本年1月に行った子の権現。足と歩行の神様だそうで、フットケア外来、補装具製作部の発展を願ってお参りしてきました



〔国際協力情報〕

西太平洋地域WHO指定研究協力センター 作業グループ会議（香港）



更生訓練所長 江藤 文夫

表記の会議が、昨年12月10－11日に香港で開催され、出席しました。

西太平洋地域のリハビリテーションに関するWHO指定研究協力センターとしては、中国武漢の同済医院リハビリテーション科、広州の中山大学病院リハビリテーション科、香港リハビリテーション協会（香港復康会）、フィリピンのネグロス西洋リハビリテーション財団、そしてわが国立障害者リハビリテーションセンターの5箇所がWHOからの指定を受けています。しかし、この5センター間で意見交換をしたり、役割分担したりするための公式の会合は、少なくともこの数年間は開催されることがありません。そこで、昨年6月にマニラで開催されたCBR（community-based rehabilitation）に関するWHOのワークショップの席で、香港復康会とWHO西太平洋地域事務局（WPRO）から協力センターがいくつかの領域で一緒に作業するための会議を開くことが提案されました。その後、10月になって香港復康会が主催してWPROから財政支援が得られることになり、急遽会議が実現することとなりました。今回の会議にはこれら5センターの代表と現在WHO協力センターの指定を申請中である韓国の国立リハビリテーションセンターにも参加が呼びかけられました。

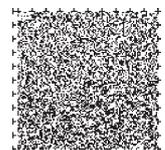
会議の目的は、西太平洋地域での協力と資源を共有するための有用な方法を開発し、協力センターのネットワークを強化することです。具体的には、(1)この地域での各協力センターの概要と実際の活動を互いに理解すること、(2)3つの重要な国際文書（国連障害者権利条約、編纂中の障害とリハビリテーションに関する世界報告書、CBRガイドライン）と我々の現在の活動への影響について討議すること、(3)今後1年間に協働して行う活動を具体的に定めること、(4)各センター間のコミュニケーションと情報共有を増やす方法について合意すること、などです。

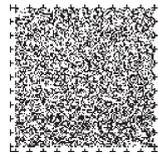
た。

会議は、市の中心部にある社会サービスカウンシルの会議室で行われました。出席者の紹介に続いてWHO-WPROを代表してMrs. Remedios Paulino、次いで主催者の香港復康会会長Dr. David Fangのスピーチで始まり、午前中のプログラムとして各協力センター及び韓国からの報告が行われ、最後に香港復康会からケースマネジャーのMr. Andrew Kwokにより「変化が重要」と題してCBRを中心に活動の歴史が紹介されました。引き続いての意見交換では、社会の事情は異なるものの、各国に共通して高齢者の問題の重要性が話題となりました。また、このセッションは香港のリハビリテーション関係者に公開で行われ、香港の活発なりハビリテーションの状況がうかがえました。

午後は、会場を変えて行われ、協力センターの協働事業の討議に向けて、はじめにWHO事務局からMr. Chapal Khasnabisが、障害とリハビリテーションに関する世界報告書の準備状況について、またCBRガイドラインの改訂作業について講演しました（写真1）。世界報告書の最終版については権利条約同様に英語、フランス語、スペイン語、中国語等に翻訳されて完成予定で、さらに視覚障害者のためのフォーマットを含めて2010年12月の世界障害デーまでには刊行されるということでした。CBRガイドラインと協力センターにおける意義については、これまでの経緯を含めて話がありました。ガイドラインは2010年10月に刊行される予定で、様々な言語に翻訳される必要がありますが、正本は英語のみとのことです。

休憩をおいて、西太平洋地域におけるCBR活動の枠組みに関する現状報告が事務局のMrs. Paulinoよりありました。マニラでのCBRワークショップで開発されたCBR活動のための西太平洋地域フレ-





ムワークは、その後の非公式な相談を経て整理され、活動の6領域と目的、細目事項が定められ、その実行のための拠点としては西太平洋地域のWHO加盟国、WHO事務局、WHO協力センターの3つが想定されています。

この報告を基調として、各センターが中心になって展開すべき活動について討議されました。香港で長年活動してきた世界作業療法士協会の前会長のMrs. Kit Sinclairが討論の推進役となってブレインストーム・セッションがもたれ、それぞれのセンターが前述のフレームワークの活動領域に結び付けて、協力すべき活動を列挙するよう求められました。ここでは非常に多くの提案がなされましたが、列挙された活動や行動の項目を整理して、翌日の会議では3つの優先すべき課題をプロジェクトプランとして決定し、各協力センターの役割分担が定められました(写真2)。

最終的に合意された協力のための優先領域としては、(1)CBRにおける最善の実践事例を収集・編集して情報提供すること、(2)支援技術のアウトカムに関してQOLや利用者満足度の探究、(3)病院とCBR

との間でエビデンスやマニュアルの情報普及システムの構築と強化、が設定され、日本は(3)を中心に協力することとなりました。また、各自のコミュニケーションを図るためのe-mailレター等の発行は香港のセンターが担当することとなりました。

公式プログラム終了後の午後は、先進国都市部におけるCBRの現場見学として、出席者全員でCommunity Rehabilitation Network(社区復康网络)のセンターを訪問しました。この施設は香港中を網羅する香港復康会のコミュニティサービスの一部として1994年に開設され、主として慢性疾患の人々を対象として、疾患の自己管理、相互援助(互助)、エンパワーメントを目的として、保健介護セクターと連携していて、医院からの退院前プログラムや健康教室などを通して慢性疾患のための多様な地域ケアを提供していました。

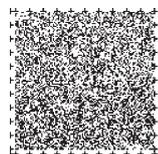
なお、今回の協力センター会議は、2010年4月15-16日に武漢で開催される中国国内セミナー(武漢と香港WHOにより1989年に開始されたりハビリテーション研修プログラム20周年記念)に合わせて開催し、プロジェクトの中間報告を含めて検討することとなりました。



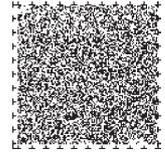
(写真1) 会議風景。CBR Matrixについて説明するWHO本部のMr. Chapal Khasnabis。



(写真2) 出席者の集合写真。後列左から、Dr. Huang Dongfeng(広州)、Dr. Xu Tao(武漢)、Dr. Wan-Ho Kim(韓国)、筆者、Mr. Chapal Khasnabis(WHO、ジュネーブ)、Mrs. Sheila Purves(香港)、Dr. Luis G Sarrosa(フィリピン)、Dr. Andrew B. Sanchez(フィリピン)。前列左から、Dr. Huang Xiaolin(武漢)、Dr. Zhuo Dahong(広州)、Mrs. Kit Sinclair(香港)、Mrs. Remedios Paulino(WHO、マニラ)



〔国際協力情報〕



帰国研修員レポート

管理部企画課

平成16年度に中国から研修に来られた研修員に現在の活動について報告していただきました。事故により頸椎を損傷し、その後、障害がある人々のために自らの生きる道を切り開いていった外科医の方です。

張 栩 (チョウ ズ) “車いすでの生活と夢”

私の事を知っている人々は、四肢まひで“何かをすることが不可能”な私に過去12年間にいろいろな事が起きたことをご存知でしょう。幸運なことに私は2004年の秋に国立障害者リハビリテーションセンターを研修員として訪問する機会を得ました。私の中では、日本は清潔で美しく、人々は暖かく、礼儀正しいというイメージを持っています。国立障害者リハビリテーションセンターでの研修により、障害がある人々に対する総合的リハビリテーションについて多くの知識を得ることができ、それは中国における自分の現在の仕事に大いに役立っています。

私は張 栩 (Zhang Xu) と申します。中国の北部の鞍山 (アンシャン) 市に住んでいます。以前は鞍山で外科医師として仕事をしていましたが、突然の災難により運命が変わりました。1997年の5月に医療支援活動のために滞在していた中東イエメンで川に飛び込んだ際に頸椎を損傷し、完全損傷の四肢まひ状態になったのです。

私は生きる意味を見出せなくなりました。そんな時に、日本の新潟医療福祉大学の作業療法の専門家である矢谷令子先生が私が入院していた中国リハビリテーション研究センターを訪問され、私を励ましてくれたのです。これによって私は失意から抜け出し、新しい人生のスタートを切ったのです。

それ以降、私は両手を動かすことはできないけれど何か意味のある事をしなくてはならないと考えるようになりました。熟慮した結果、中国の障害がある人々のためにリハビリテーションについて学ぶことにしました。この夢を実現するために、矢谷先生

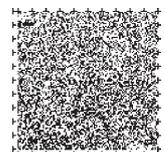
が日本の国立障害者リハビリテーションセンターでの研修を紹介してくれました。国立障害者リハビリテーションセンターでは総合的リハビリテーションサービスの概念や最新の技術を学び、スタッフが一生懸命にまた親切に奉仕する姿勢が印象的でした。その頃、私はアメリカのサンディエゴ大学でリハビリテーションカウンセリングについて遠隔地教育プログラムによりインターネットを利用して修士の学位を取得中でした。私のような四肢まひ者にとって学習を続けることは挑戦でしたが最後までやり通しました。アメリカに3ヶ月滞在して学習をした後、リハビリテーションカウンセラーとしてのプログラムを修了しました。

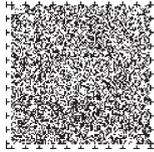
中国にはリハビリテーションカウンセラーという職種はまだありませんが、日本の国立リハセンターとアメリカのサンディエゴ大学で学んだ事を生かして鞍山で障害がある人々を支援するNGOを発足させました。

鞍山には障害がある人がおよそ120,000人登録されています。主な障害の原因は先天性か労災・交通事故によるものです。

世界の多くの場所と同じように、鞍山でも障害がある人々は貧困と困難の中で生活しています。労働災害の人以外は決まった収入はなく、政府からの給付金でかろうじて生きているのです。

私達のNGOの活動内容はCBR (地域に根ざしたリハビリテーション) です。リハビリテーションの支援をし、障害がある人々の声を代弁し、彼らが平等な生活を手に入れることを目的としています。





私達は現在、家庭訪問、障害がある子供の学習支援、外出支援、車いすの配布の4つの活動を行っています。

障害があるために貧困生活を送る家族への定期訪問では、彼らが愛情に触れて希望を見出せるように、何が必要で、どのような支援をすれば良いかを特定することをしています。

訪問時は食べ物、生活必需品を持参し、必要に応じてカウンセリングも行います。

障害がある子供達は移動の問題等により、公立学校で正規の教育を受ける機会がありません。彼らにとって読み書きを学習し、自分の障害とリハビリテーションについて学ぶことは非常に重要なので、読

み書きのプログラムを実施しています。また、私達が行けない地域の子供達がTVで学習できるようにDVD教材を作成しました。現在65名の子供が年齢、障害に応じてこのプログラムを受けています。

また、障害がある人々と海や山に行く外出支援やアメリカのNGOと協力して車いすの寄付も行っています。これまでに1,200人の人々に車いすを贈りました。

私はこれらの活動を通じて、今の自分を誇りに思っています。これも日本や他の国々の友人の支援があったからできることです。またいつか日本を訪れ、国立障害者リハビリテーションセンターで新しいリハビリテーションの知識を学びたいと思っています。



アメリカサンディエゴ大学の卒業式にて



障害がある子供達との外出支援で山にかけた時の写真

